

問い合わせ先：北信越支部幹事 竹内由香里  
(森林総合研究所十日町試験地 気付  
Tel：025-752-2360,

Email：yukarit@affrc.go.jp)

(2008年11月19日受付)

## 北信越支部

# 北信越支部学習会報告

テーマ：高標高地域での積雪を含む気象観測の重要性

講師：鈴木啓助（信州大学理学部教授/山岳科学総合研究所所長）

日時：2008年11月20日（木）16：25-17：55

場所：新潟大学災害復興科学センター会議室

参加者：26名

本学習会は新潟大学災害復興科学センターセミナーとの共催で実施されたものである。学習会では、信州大学山岳科学総合研究所において最近取り組まれている高標高地域での気象観測について、その現状と重要性、さらに現在の観測状況を解説していただいた。会場には、学会員や教職員だけでなく、多くの学生が足を運んでおり、それらの学生にも興味を持てる内容であった。

講演の中では、まず、信州大学山岳科学総合研究所について、その設立背景と現在の活動状況についての紹介があった。次いで、日本の高標高地域において気象観測がほとんど行われていない現状について指摘されるとともに、高標高地域の気象観測の重要性を説かれた。それを受け、信州大学山岳科学総合研究所の高標高地域における気象観測の取り組みを紹介された。さらに、既存のデータから、長野県や新潟県十日町市の気温や積雪深の変化傾向について解説された。

気象データの解説から、気温は上昇している場所が多いが、積雪深は一つの地域で標高や年代の取り方によって、変動の仕方が違うということがわかった。特に、近年、長野県の700m以上の地域において、積雪深に微増傾向がみられることが



写真 1 学習会の様子

印象的であった。温暖化による環境の変化は、一様でなく、地域によって違い、複雑であることを改めて感じた。このような、高標高地域における温暖化の影響を確認するためには、継続的な観測が必要であろう。

今回の学習会では、高標高地域での気象観測の希少性、重要性が理解できた。気象観測が行われてこなかった背景には、山岳地域における厳しい自然環境下での観測の難しさがあるものと推測できる。その意味で、信州大学山岳科学総合研究所の試みは、非常に価値がある。今後は、学会全体として、高標高地域での気象観測の重要性を受け止め、信州大学山岳科学総合研究所のような試みが増えてゆくことを願いたい。

(新潟大学大学院自然科学研究科 山口健太郎)

(2008年12月2日受付)